

陶山神社の鳥居



「陶山神社」は江戸時代には「宗廟八幡宮」と呼ばれていました。「陶山神社」と呼ばれるようになったのは明治になってからのことです。一般には「とうざんじんじゃ」と呼ばれていますが、宮司さんは「すえやまじんじゃ」と呼んでいます。ここには応神天皇、鍋島直茂、そしてここが「焼き物の神様」といわれる所以である李参平がまつられています。

境内には「陶山神社」を象徴するような磁器製の鳥居をはじめ、同じく磁器で製作された狛犬や大水がめなどが奉納されています。このほかにもたくさんの灯籠、狛犬が奉納されています。これらの奉納品は「陶山神社」の祭礼である「おくんち」の時に、その年々の「くんち」の当番区から寄進されたものです。

明治20年には、赤絵町から狛犬一対（十代今泉今右衛門の製作）が、明治21年には日恵古場（稗古場）から磁器製の鳥居（製造人 岩尾久吉、角物細工人 金ヶ江長作、丸物細工人 峰熊一）が、翌年の当番区の中野原区からは、大水がめ（製造人 藤崎太平、細工人 小山直次郎、井手金作、画工人 川浪喜作）が寄進されており、当時の名工たちの作品をうかがうことができます。



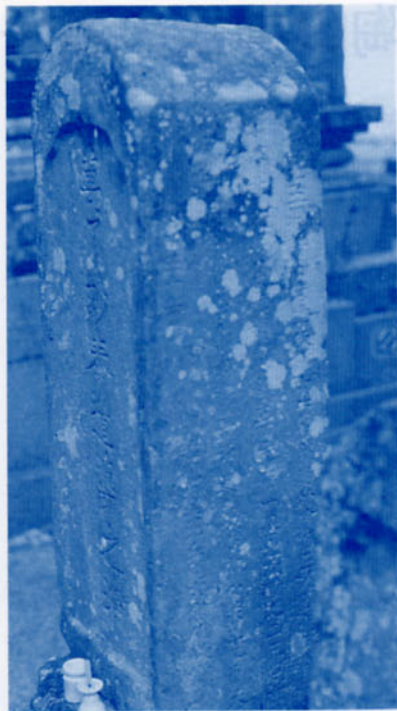
至上幸平



皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.16



深海宗伝

ふかうみ そうでん

＜宗伝の妻、百婆仙の碑（報恩寺）＞

有田磁器の創始期には、複数の陶工集団があったことが分かっています。それらの集団を文献に求めてみると前号で紹介した、李参平、家永壺岐守、そして今回紹介する深海宗伝の3つの系統を確認することができます。

深海宗伝の経歴に関する文献は、稗古場・報恩寺にまつられている「萬了妙泰道婆之塔（通称 百婆仙の碑）」の碑文のみが残されています。この石碑は宝永2年（1705）に建立されており、現在では風化が激しく判読するのが難しくなっていますが、かつて読んだ人の記録によってその内容を知ることが

できます。

宗伝というのは法名で、朝鮮の深海というところの出身です。宗伝は、豊臣秀吉の起こした文禄、慶長の役（1592～1598）で、朝鮮へ従軍した武雄の領主・後藤家信が帰国する際に、武雄の広福寺の別宗和尚について日本へやって来たといわれています。数年間は広福寺の門前に住んでいたようですが、後に家信から武雄市武内町の内田というところに土地を与えられています。

宗伝はこの地に陶器製造地を開き、自作のやきものを家信と別宗和尚に献上しています。そこで製作されたやきものは、宗伝の本名をとって「新太郎焼」と呼ばれたといわれています。宗伝は元和4年（1618）10月29日に亡くなりました。

宗伝の死後、その後を守ったのは妻の百婆仙です。本名は分かりませんが、孫たちから慕われて「百婆仙」と呼ばれたといわれています。彼女は宗伝の遺志を継ぎ、子供の平左衛門とともに、やきもの製作を続けました。

ちょうどこのころ有田では磁器生産が活発になってきました。まもなく百婆仙は内田から同族を伴って、良質の磁器原料に恵まれた有田・稗古場に移ってきています。このとき内田に住んでいた高麗人は、ことごとく稗古場へ引っ越したといえますから、百婆仙は多くの朝鮮人陶工から尊敬されているようです。

宗伝、百婆仙の夫婦は朝鮮から渡来した磁器創始期における有力な指導者であったようです。



血山の風物



正月行事

一年の締め括りの行事である「煤払い」を終え、窯でたく薪に輪じめをしてつくった門松ができあがると、窯焼きさんの仕事場は正月を迎える準備が整います。この一連の作業が終わると「ほこり流し」といって、ふるまい酒をだす酒宴が開かれます。そして翌年の窯の良いできを祈り、商売繁昌を祈りながらそれぞれの思いで新年を迎えます。

窯焼きさんの家では、職人さんとの契約が1年で切れるので、12月も半ばになると翌年の雇用の話し

合いが始まります。時によっては元旦の朝まで話し合いが続いたといわれています。話が決まると前銭として、給料の一部が支払われていました。このようなわけで、年末は格別忙しく正月料理に手間をかける余裕などないため、なまもの主体の料理が正月料理として定着しています。

3日になると、赤絵屋では「初筆おろし」、窯元では「車おろし」、商人の家では「帳祝い」という仕事始めの行事が行われます。「車」というのは「ろくろ」のことです。「ろくろ」の上に粘土をのせて皿、碗などをつくります。この行事が終わると酒宴が開かれました。「帳祝い」の行事は行われなくなりましたが、「車おろし」の行事は現在も行われています。

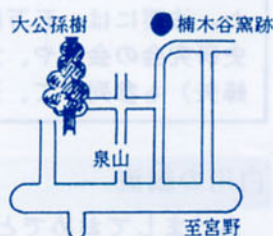


平成3年度の 古窯跡 発掘調査

毎年恒例となった窯跡の発掘調査もようやく終り、出土した膨大な量の陶磁片と日々格闘の毎日を過ごしております。

本年度は10月21日から12月5日にかけて泉山の楠木谷窯跡、猿川の天神町窯跡、外尾山の外尾山窯跡の3か所を調査し、有田の誇りである窯業の歴史解明にまた新たな1ページを加えることができました。

また調査の際には地権者や近所の方々には大変お世話になりまして、遅ればせながらこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。



●楠木谷窯跡

楠木谷窯は泉山にあり、有田で最も東側に位置する窯場です。現在は畑や宅地として利用されており、窯の位置を想像することは難しくなっています。

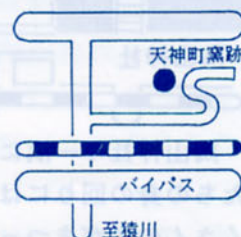
この窯は江戸時代には「歳木山」の窯場の一つで、ほぼ同時期に操業していた2基の登窯が発見されました。窯場の使用時期は1640年代～1660年代ごろで、せいぜい20年ほどしか使われていませんでした。

歳木山は「酒井田柿右衛門家文書」によると、初代柿右衛門である「喜三右衛門」が色絵磁器生産に成功した場所と伝えられています。この文書によると、色絵磁器の製法は、伊万里の陶商東嶋徳三衛門が長崎で「志いくわん」という中国人から伝授され、歳木山にいた喜三右衛門に頼んで焼かせたといわれます。そして喜三右衛門はいろいろ試してみましたがなかなかうまく行かず、最後は「ごす権兵衛」という人と協力して完成させたと記されています。その後正保4年(1647)には長崎で、中国人やオランダ人を相手に売り始めたとされていますので、おそらくそれより少し前に、色絵磁器の製法が完成したもののと思われます。

この色絵磁器を最初に焼いたとされる窯が、果たして楠木谷窯だったかどうかは、はっきりとしません。しかし泉山には、同じころの窯としては隣接す

る枳藪窯があるだけで、可能性としてはかなり高いと思われます。実際に今回の調査でも、色絵磁器を最初に焼いた窯かどうかは別としても、初期の色絵素地がたくさん出土しています。この中には、九州陶磁文化館が所有している「柴田コレクション」とほぼ同じ物もいくつか含まれていました。このころはまだ赤絵町ができる以前で、上絵付けは各窯焼きの工房で行われていたと思われます。

出土した製品は圧倒的に5寸～7寸ほどの小型の皿が多く、型打ち成形の変形皿もいくらか目に付きます。極めて精緻な製品と粗質な製品があり、一見製作時期が異なるように思われますが、同じ層から出土しており、同じころに作られていたことが分かります。登窯は焼成室が10数室以上あるのが普通で、複数の窯焼きが共同で使用していました。ですからおそらく、新しい技術を持った陶工と古い技術の陶工が混在していたため、質の大きく違う製品が同じ窯跡で出土するのだと思われます。



●天神町窯跡

天神町窯跡は猿川にあり、今はバイパス道路や鉄道によって寸断されていますが、猿川窯とは声も届くような距離にあります。江戸時代には有田中学校の近くにあった長吉谷窯とともに、岩谷川内山の窯場であったと推定されます。

窯跡があったと思われる部分は、現在造成されて宅地になっており、物原の部分も道路を作る際に壊され、ほとんど残っていませんでした。

一説によると、藩窯が南川原や大川内に移る以前は岩谷川内にあり、天神町窯がその窯であるとも言われていました。しかし出土品を見る限りでは、いくらか珍しい碗などがあるだけで、明確に藩窯とのつながりを連想させるような製品は、出土しませんでした。

窯体は発見されませんでしたが、出土した製品などから見て、1640年代～1650年代ごろに短期間使用された窯場であろうと推定されます。

次回は残った外尾山窯跡について記してみたいと思います。この窯場には6基以上の窯があり、有田でも最も長い間、煙を絶やさなかった窯場であったことが確認されました。

発掘れぼうと



こうしんとう
庚申塔

陶山神社の一隅に庚申塔がまつられています。私たちの身の回りには、よく見渡してみると、実にたくさんの神がまつてあります。かつて人々は同じ信仰を持つ者で講を結び、特定の日に集まって神をまつり、飲食をともにしたりしました。日待講、月待講、伊勢講、庚申講などの講がそうです。発生した当時とは形態を変えながらも、現在に引き継がれているものもあります。

庚申とは、十干十二支を組み合わせた暦法の庚申の日の夜に、三尸（さんし）という虫が眠っている間に身体から抜け出し、天帝にその罪を報告するで命を奪われるという信仰です。ですからこの日の夜は庚申待といって、眠らずに憤むということが行われ、庚申様を祈り、夜を徹して語り明かす庚申講が生まれました。

2か月（60日）に一度巡ってくる庚申の日は、有田のやきもの職人さんにとっては、久々の休日でもあります。この日は仕事を休み酒宴を開いて楽しんだといいます。信仰や飲食をともにし、語り合うことのできた講は、社交や娯楽の場であったわけです。

現在、陶山神社には2つの庚申塔があり、写真の庚申塔には「天保三年（1832）壬辰八月」の銘が刻まれています。この塔は本幸平山の人たちによって建立されたものです。

お気付きの点がありましたら、ご一報ください。

館報「皿山びとの歌」では毎回年中行事や、食生活、人生儀礼、石造物などを取り上げています。これらの習慣は同じ有田であっても、地区やそれぞれの家庭によって、やり方がすこしずつ異なっています。紙面とはやり方が違うとか、ほかにこのようなことも行うなど、お気付きの点がありましたら、ぜひご一報ください。

江戸相撲力士
五万嶽を法要

●12月8日、江戸時代の力士五万嶽の法要が、岩崎墓地にある墓前で行われました。法要には、五万嶽の調査を続けている町郷土史研究会の会員や、大相撲の小野川親方（元関取蜂矢）も参列して、五万嶽の冥福を祈りました。



白川の細流

あけましておめでとうございます。近頃、1年があっという間に過ぎていってしまい、この1年何をやったのだろうと、ふと不安になることがあります。今年はあらゆる面において、収穫の多い年にしたいと願っています。つきなみではありますが、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

ところで先日、第2回目の民俗調査を終了いたしました。町から調査を依頼した、駒沢大学の学生の若いパワーのおかげで、資料がたくさん集まりました。ご協力くださった町の皆さんと、厳しい寒さのなか自らの足で資料を収集してくださった学生の皆さんに、紙面をおかりしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。現地調査はあと2回残っています。来年度の調査もよろしく。（萬）

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No. 16

発行年月日 * 平成4年 1月 1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678